HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自著紹介 『「カルト」を問い直すー信教の自由というリスクー』中公新書ラクレ 819円
Author(s)	櫻井, 義秀
Issue Date	2006
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/17096
Type	article
File Information	column20062006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

自著紹介　『「カルト」を問い直す―信教の自由というリスク―』中公新書ラクレ　819 円

北海道大学　　櫻井　義秀

１　「カルト」問題に関わった経緯

私が「カルト」問題と最初に関わったのは、1980 年代の末頃になる。北星学園大学を中心とした社会病理研究会の依頼により、札幌市における霊感商法被害の実態を消費者センターや弁護士会から提供してもらった資料をもとに考察した。夕張の炭鉱事故で夫を亡くして札幌に出てきた女性が、夫の慰霊と開運のために高麗大理石壺や朝鮮人参濃縮エキスを 1200 万円相当購入し、慰弔金を使い果たした事例に驚いた。これは典型例であるが、札幌市民の意識調査でも、社会や自分の将来に不安を抱えている人ほど、霊能・祟り信仰を信じる傾向にあることが明らかになった。不安を抱えた社会的弱者ほど、霊感商法につけこまれるというわけだ。

その後、私の専門はタイの地域研究（農村開発や仏教寺院の調査等）なので、この問題から数年遠ざかった。1995 年のオウム真理教事件の後に、私の書いた論文が統一教会により、違法伝道訴訟において原告側の「マインド・コントロール」論を批判する論拠として使われた。宗教社会学では、「カルト」「マインド・コントロール」という概念を用いてこなかった。それはこんな理由があるからだということを書いて、社会問題化する宗教の多面的理解を説いたところ、統一教会が、信者達はマインド・コントロールされていないということの証拠に使った。私に断りもなく、論旨の取り違えもはなはだしい。

しかし、事情はどうあれ、製造物責任というものがある。統一教会の人達の言明にどれほどの根拠があるのか調べてみようと考えた。第二の「カルト」問題との遭遇である。以来、10 年ほど主に統一教会の布教・教化過程、宣教・資金調達活動を調べてきた。

２　「カルト」的発想への批判

およそ、どのような学問にも理論の前提があり、それは学問ごとに異なっている。だから、理論の枠組みや発想法、応用の仕方を大学や大学院で何年も学ぶわけである。宗教学や社会学の考え方は心理学や精神医学、法律学と異なる。同じ現象が違った側面から説明される。全てを一つの論理で説明しきることが可能という発想は、自然科学にも人文・社会科学にもない。統一原理以外は全て誤り、ヴァジラヤーナ以外では人は救われない、といった発想の結末はみなさんご存じの通りだ。

実際、正しいか/誤りか、これかあれか、といった考え方は、特定教団の信者に限らず、私たちが陥りやすい思考パターンといえる。メディア関係の人も、どちらですかという尋ね方をする。こういう見方をすればこうなるし、他の考え方もあるでしょうと説明しても、結論だけお願いしますということになる。その方が分かりやすいし、そういう答えが求められているということらしい。確かに、今の世の中、複雑なことを複雑に語るよりも、これはこうでしかないと明快に言いきるほうがうけがよい。

「カルト」的思考の特徴は 1 と 0 しか使わない発想といえる。1 と 0 の間にあるものを見ようとしない。なぜ、ある人がその間に立とうとするのか、或いは別な平面にいるのかを理解しようとしない。自分と同じ位置に人が立っていないと不安になり、立つ位置を相手

に強要する。もっともらしい理屈をつけて、それらしい雰囲気のなかでこの押しつけが行われる。「マインド・コントロール」として批判されてきたことがこれである。

私は、「カルト」問題を理解し、「被害者」を産み出してきた特定教団を適切に批判するためには、今述べたような「カルト」が用いる絶対的な正義論ではまずいと考えている。もちろん、批判の原点には信条や正義感がなければならない。しかし、人間や社会は複雑であり、同時に豊かなものでもある。一面的理解は許されない。そこで、「カルト」視される特定教団と批判者が対立、葛藤している場面において、双方の言い分がどこでどうずれており、どのような複眼的理解の可能性があるのかを明らかにしようと考えた。

3　本書の構成

1 章 現代日本の「カルト」問題
2 章 オウム裁判に見る「信教の自由」というリスク
3 章 宗教をやめない自由 vs.やめさせる自由―脱会カウンセリングへの告発
4 章 宗教組織がカルト化する時―性的暴行事件より
5 章 「カルト」の暴力―オウム真理教の教団戦略とその破綻
6 章 「カルト」を拒む論理、受け入れる論理
7 章 キャンパス内の「カルト」問題

葛藤的局面として、3 章では統一教会による「強制棄教」批判の論拠と、家族や関係者が大切な人に脱会を説得する論拠を裁判の事例をもとに検討した。6 章では、オウム（アーレフ）信者や関係者の居住、就学・入学をめぐる地域社会や学校における対立をみている。

なぜ、宗教団体が「カルト」化するのか。それを聖神中央教会における牧師と信者の関係、オウム真理教におけるグルと信者の関係、及び教祖のリーダーシップ論、教団の組織論、経営論から考えてみたのが、4 章と 5 章である。

2 章では、死刑を求刑された弟子達の裁判から、「信教の自由」に課せられた過大なまでの自己責任の重さと、選択の誤りが本人や家族はもとより、一般市民を巻き込んでしまう宗教的過激主義のリスクをとりあげた。7 章では、大学構内でどれほど問題のある布教活動が行われ、多くの学生が入信・活動し、保護者や教師が対応に追われているのかを述べた上で、現状考えられるだけの対応策を示している。

そして、説明の順序が逆になってしまったが、1 章において、この拙文に書いてあるような筆者の「カルト」問題研究の経緯と、現代のセラピー社会における「いやし」の危うさを書いている。

現代における「カルト」問題のトピックを日本社会に即して整理してあるのが本書の特長であり、欧米の宗教社会学や「カルト」情報の受け売りではない。

4　誰に読んでもらいたいか

本であるからには読者を想定している。まずは「カルト」問題の深刻さ、問題の解決のしがたさを、まだこの問題に巻き込まれていない人々に知ってほしいと思う。「被害者」になるリスクは誰にでもある。特に、学生と学費支援者の方にキャンパス内勧誘の実態を知り、予防に努めてもらいたい。同時に、「カルト」問題と、いま、ここで格闘しておられる

方々には、ひとりではないこと、支援の手をさしのべる仲間がいることも知ってほしい。

最後に、しかし、最も重要な読者として私が想定しているのは、「カルト」視される団体の脱会者の人達、そして現役信者、二世達である。これまでの自分の発想の仕方や経験をふりかえったり、現在の自分や自分を取り巻く環境を内省したりする際に、本書の複眼的思考は長い目で見て役に立つのではないかと考えている。

なお、本書の論述の仕方に関して、新書にしては難しいという評判がある。確かに、ノウハウ本ではないし、2,3 時間で読めてスッキリというわけにはいかない。しかし、考えてみるならば、現代日本の「カルト」問題、「被害者」を取り巻く状況の深刻さを短時間で理解し、こうすればいいんだよと簡単にいうわけにはいかないのではないか。もっとも、私自身の能力の問題もあって、分かりにくい部分もあるかと思われる。ご容赦願いたい。